研究プロジェクト成果報告書（一般研究・特別研究）

研究課題　「課題に対して、主体的に関わり、他者とともによりよい解決を求めていく力を育み、変化の激しい社会をよりよく生きる子供が育つ教育課程の創造」

研究期間 平成２８年度～平成２９年度

研究代表者　上越教育大学附属小学校　校長　岩﨑　浩

研究組織

氏名	所属・職名	役割分担
岩﨑　　浩	附属小学校・校長	研究代表者；研究の総括指導
中島　秀晴	附属小学校・副校長	研究分担者；実践研究の総括
青木　弘明	附属小学校・教頭 他　教諭１７名	研究分担者；研究の立案、評価
梅野　正信	上越教育大学・教授 他　大学教員１６名	研究協力者；理論的、専門的見地からの指導
関原るみ子	上越教育事務所指導主事	研究協力者；県行政の見地からの指導
笠井　将人	上越市大手町小学校・教諭 他　公立小学校教諭２０名	研究協力者；公立校からのデータ収集、活動構想検討

１　研究開発課題

社会の様々な課題に対して、主体的に関わり、他者と共によりよい解決を求めていく力を育むために、生活科や総合的な学習の時間との関連を図った「創造活動」と、各教科を実践的に学ぶ「実践教科活動」を創設した際の教育課程に関する研究開発を行う。

２　研究の概要

現代社会は、人間がこれまで蓄積してきた知識や技術だけでは、解決することが難しい問題が溢れている。また、物質的な豊かさとは裏腹に心の荒廃が叫ばれ、様々な社会問題が生まれている。更に、人工知能やコンピュータの発達によって、人間の労働力がロボットに取って代わりつつある社会をむかえている。

このような社会をよりよく生きる子どもを育むためには、人間だからこそ発揮できる力を育成する必要がある。そこで、当校は、子どもの「感性」に着眼して新たに「創造活動」「実践教科活動」「実践道徳」「集団活動」の４つの教育活動を創設し、４つの教育活動を問い直しながら、それぞれの役割を整理してきた。特に４年次は、「感性」をはたらかせる子どもの姿を基に、「感性」のはたらきに着眼し、「感性」のはたらきを各教育活動の目標に位置付けた。そして、その目標を基に、子どもの「感性」をはたらかせる姿をとらえながら、実践を積み重ね、教育活動の評価と改善を図った。

３　研究の目的と仮説等

（１）研究仮説

「感性」のはたらきに着眼しながら、創造活動を中核とした４つの教育活動を構想・展開することを通して、「材」の事実にふれ、ありのままにとらえながら、自らの意志で行動・判断したり、同じ「材」とかかわる他者と相互作用しながら、よりよさを追求したり、「材」の本質をとらえながら、新たな意味や価値をつくったりする子どもを育むことができる。

（２）教育課程の特例

「創造活動」	・生活科と総合的な学習の時間を統合し、全学年において実施する。 ・「材」と息長くかかわりながら、自然・人・文化をありのままにとらえる活動を設定する。 ・教育課程の中核に位置付け、他の３つの教育活動との関連を図る。
「実践教科活動」	・実践国語科、実践社会科（３～６年）、実践算数科、実践理科（３～６年）、実践音楽科、実践図画工作科、実践体育科、実践家庭科（５～６年）、実践外国語科（４～６年）で構成する。 ・教科の知識や技能を自ら構成する実践的な活動づくりに取り組む。
「材」･･･子どもが「感性」をはたらかせながら、かかわりをつくる人・もの・こと	る時間を全学年において設定する。
「集団活動」	・学級活動、プレイングチーム活動、集会活動、プロジェクト活動（５～６年）、サークル活動（４～６年）、学校行事で構成する。

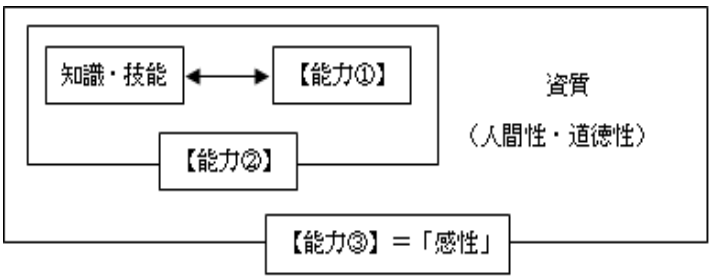
４　研究内容

（１）教育課程の内容

○当校が捉える「感性」と資質・能力

私たちは、子どもは、自ら「材」にはたらきかけ、ありのままに「材」を捉えながら、新たな意味や価値をつくり、よりよく生きる行為を生み出す存在だと捉える。子どもが「材」とのかかわりを深めながら、よりよく生きる行為を生み出す過程で一貫してはたらいている資質・能力が「感性」である。

一般的に、感性は、論理回路とは別の知的判断を行う過程や能力に関与する、包括的・直観的な人間の能力といわれている。人工知能の論理的判断能力が、人間を超越していく現代社会を鑑み、私たちは、「感性」は、人間だからこそ発揮できる資質・能力の根幹をなすものと考えるようになった。「感性」を、感じる心や感受性などの受動的な能力だけでなく、能動的な価値判断能力をも支えるものと捉えた私たちは、「感性」を「包括的・直観的に対象を捉えて行動・判断を生み出す力であり、知性と相補的にはたらきながら、よりよい『自分』をつくるもの」と定義した。



「感性」は、子どもが自らの中に知識・技能を構成する過程や、道徳性をはぐくむ過程にもはたらいているものである。つまり、知識・技能（コンテンツ）と対置されるような能力（上図【能力①】）としてではなく、知識・技能を構成する過程で一体としてはたらいている能力（上図【能力②】）や、人間が本来もっている人間性や道徳性をも含めた資質をも含めた資質・能力（上図【能力③】）として、「感性」と捉え、４つの教育活動全体で培う資質・能力とした。

○「感性」の３つのはたらき

「感性」をはたらかせながら、「材」とのかかわりを深める子どもの姿の集積を通して、私たちは、「感性」には「主体性」「協働性」「創造性」の３つのはたらきがあることを捉え、それらを、以下のように整理した。

「主体性」；「材」の事実にふれ、ありのままをとらえながら、自分の意志でよりよく行動・判断する

子どもが「材」と出あうとき、身体全体で感性的にはたらきかける直接体験が何より大切だと考える。直接体験とは、知識や技能を身に付けることを目的としたり、「材」を分析的にとらえようとしたりするのではなく、子どもがありのままの「材」を感受し、自ら動き出す体験のことである。「主体性」は、感性的に「材」にはたらきかけ、「材」を感受し、自らの意志で動く子どもの姿に具現されている。自分の道筋と歩調で「材」とのかかわりを深めていく子どもは、ありのままの「材」をとらえ、「材」を通して世界の見方をひろげていく。時には、「材」とのかかわりにおいて、矛盾や対立が生まれることもある。しかし、「材」を自分事として認識している子どもは、自らに問い続け、矛盾や対立を乗り越えながら、自分の意志で行動・判断すると考える。

このような「感性」のはたらきを「主体性」ととらえ、「材」と出あった子どもが第一にはたらかせているものと考えた。しかし、自分の意志でよりよく行動・判断する姿は、

「材」との浅いかかわりだけでは、生まれにくい。子どもが、「材」のもつ矛盾や対立を自覚化するときには、他者との価値観の違いに気付いたり「材」の事実や本質にふれたりしていることが条件であることが、これまでの研究を通して明らかになってきた。

したがって、「主体性」は、「材」との出あいにおいては、「協働性」や「創造性」の土台となる面もあるが、「主体性」を更に引き出しはぐくむ上では、「協働性」や「創造性」のはたらきが必要である。

「協働性」；同じ「材」とかかわる他者と相互作用しながら、共によりよさを追求する

子どもが、「材」とかかわるとき、「材」を一方的に享受するのではなく、「材」にはたらきかけ、はたらきかけられながら、「材」と一体となって活動している。その際、同じ「材」とかかわる他者同士は、その「材」を感じている仲間としての感情的な一体感をつくり上げていく。自分ー他者ー「材」の相互作用の蓄積は、互いに「材」のとらえを確かにしながら、具体的な相互作用の活動を支え、集団としての活動を方向づけていく。子どもは、「材」をとりまく他者と、協働的に社会・文化を構築しながら、共によりよさを追求すると考える。

このような「感性」のはたらきを「協働性」ととらえ、「材」とかかわりを深めている子どもがはたらかせているものと考えた。しかし、「協働性」の発揮は、個人が「材」をとらえていることが重要であり、「主体性」の発揮なくして、「協働性」を引き出しはぐくむことは難しいと考える。なぜなら、同じ場で、同じ行為をしている子どもは一見協働的に学んでいるように見えるが、互いに主体的に学んでいる状況だからこそ、他者の「主体性」を感じ、他者の他者としての自分を認識するからである。このような認識があって、初めて集団の中に自分を位置付け、集団としての役割や目的を自ら創出し、互いに実感の伴う解を探ったり、自分たちの在り方を見つめたりするのである。

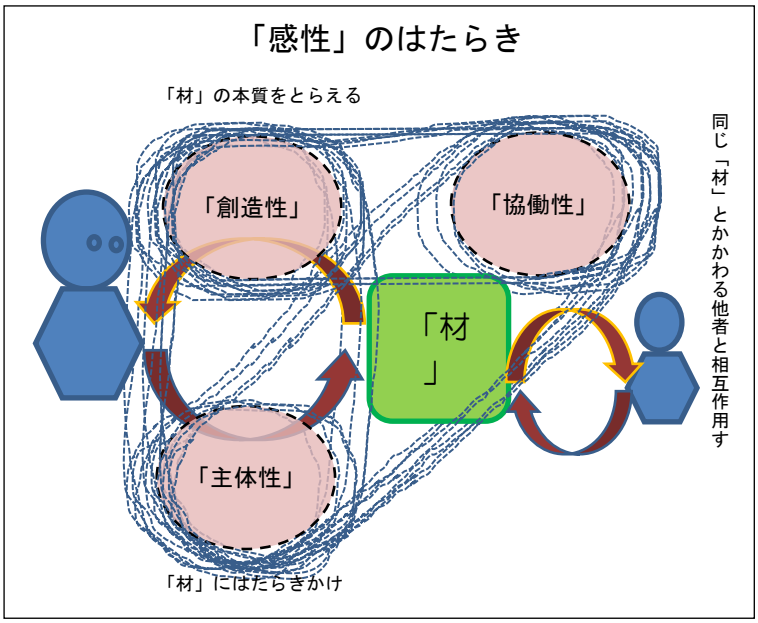
「創造性」；「材」の本質をとらえながら、新たな意味や価値をつくり出す

子どもが、「材」と深くかかわるとき、論理や既存の価値観ではたどり着けないような鋭い考えやアイデアを導き出すことがある。それは、「材」をとらえて得た様々な情報（諸感覚による気付き、感情、意志、記憶、推論、抽象的な考えなども含む）がつながり、その子の潜在意識の中に、体系化・構造化されるからだと考えた。子どもはありのままの「材」をとらえながら、「材」の事実にふれ、矛盾や対立を乗り越えながら、さらに深く対象とつながろうとする。その繰り返しの中で、潜在意識の体系がひろがり、新たな意味や価値をつくり出すことにつながると考える。

このような「感性」のはたらきを「創造性」ととらえ、「材」と深くかかわった子どもがはたらかせているものと考えた。創造活動においては自然・人・文化についての意味や価値をつくり、実践教科活動においては、その教科ならではの「材」についての意味や価値をつくり、実践道徳においては、道徳的な意味や価値をつくる。意味や価値をつくる子どもは、世界の見方・考え方をひろげ、よりよい行動・判断をつくっていく。「主体性」や「協働性」を基盤として「創造性」がはたらくと共に、「創造性」のはたらきは、「主体性」や「協働性」のはたらきに影響を及ぼす。

○連関する「感性」の３つのはたらき

「感性」の３つのはたらきを捉えた私たちは、「主体性」「協働性」「創造性」は、相互に複雑に絡み合いながら連関しているものと考えた。したがって、「感性」を、「主体性」「協働性」「創造性」の３つのはたらきの総体と捉えるとともに、３つのはたらきが連関している子どもの姿をとらえながら、教育活動を構想・展開し、指導方法の改善に取り組んだ。



○「感性」の３つのはたらきを位置付けた４つの教育活動の目標

私たちは、「感性」の３つのはたらきを教育活動の目標に位置付けて設定した。その目標を基に、「感性」をはたらかせながら、「材」と一体となる子どもの姿をより具体的に思い描くとともに、「しかけ・手立て」（「材」と一体となる子どもの姿を思い描き、具体的に講じるはたらきかけのこと）の吟味や改善につなげたりした。

＜創造活動＞

目標；体験からわき起こる思いや願いを基に、自ら「材」にはたらきかけたり（「主体性」）、仲間と共に学級の目的や自分の役割を創出したり（「協働性」）、自然・人・文化の認識をひろげたり（「創造性」）する。

【１年生】
・校地内に自分たちでつくり出す場に自分を存分に発揮してはたらきかけたり（「主体性」）、仲間と共に楽しみや喜びを味わったり（「協働性」）、自分の生活を豊かにしたり（「創造性」）する。

【２年生】
・校地内に自分たちでつくり出す場に挑戦や試行を繰り返してはたらきかけたり（「主体性」）、仲間と共にやり遂げる達成感を味わったり（「協働性」）、学級集団としての生活を豊かにしたり（「創造性」）する。

【３年生】
・学校外の地域に心躍らせてはたらきかけたり（「主体性」）、仲間と共に「材」のよさを味わったり（「協働性」）、自分と地域とのかかわりをつくったり（「創造性」）する。

【４年生】
・身の回りの自然に身体全体で繰り返しはたらきかけたり（「主体性」）、仲間と共に「材」のよさを味わったり（「協働性」）、自分と自然・人・文化のかかわりをつくったり（「創造性」）する。

【５年生】

・人間社会における人の営みにふれる「材」に自分の感覚をひらいてはたらきかけたり（「主体性」）、仲間と共に「材」の意味や価値を見いだしたり（「協働性」）、人間が生きていく上での自然・人・文化のつながりを見つめたり（「創造性」）する。

【６年生】

・人間社会におけるくらしの現況にふれる「材」に自分の感覚をひらいてはたらきかけたり（「主体性」）、仲間と共に「材」の意味や価値を見いだしたり（「協働性」）、人間が人間としてよりよく生きていく上での自然・人・文化の在り方を見つめたり（「創造性」）する。

＜実践教科活動＞

目標；自分の道筋と歩調で教科の本質にふれる「材」とかかわったり（「主体性」）、仲間と共によりよく問題を解決したり（「協働性」）、新たな知識や技能を自らの中に構成したり（「創造性」）する。

【実践国語科】

・ことばの世界をひらき、ことばが意味するものをとらえたり（「主体性」）、ことばに内在する問題について話し合ったり（「協働性」）、ことばの世界を創出したり（「創造性」）する。

【実践社会科】

・社会的事象に自らかかわったり（「主体性」）、仲間と共に社会をよりよくとらえようとしたり（「協働性」）、社会的事象の認識をひろげたり（「協働性」）する。

【実践算数科】

・数量や図形についての感覚をひらいて試行したり（「主体性」）、仲間と発見やふしぎを共有したり（「協働性」）、自分の数理の世界をひろげたり（「創造性」）する。

【実践理科】

・不思議を与えてくれる自然とつながったり（「主体性」）、仲間の見方・考え方から自然をとらえ直したり（「協働性」）、不思議をとらえるためのきまりやつくりを見いだしたり（「創造性」）する。

【実践音楽科】

・音楽文化の視野を広げながら音楽に没頭したり（「主体性」）、音楽を他者と共有する喜びを味わったり（「協働性」）、自分にとってよりよい音楽を創ったり（「創造性」）する。

【実践図画工作科】

・造形の魅力を感じ、材料や場にはたらきかけたり（「主体性」）、仲間と共によりよい表現を追求したり（「協働性」）、造形の意味をつくり変えながら新たな魅力を生み出したり（「創造性」）する。

【実践家庭科】

・自らの家庭環境にはたらきかけたり（「主体性」）、仲間の気付きや考えから自分の家庭生活見つめ直したり（「協働性」）、より豊かな家庭生活をつくったり（「創造性」）する。

【実践体育科】

・体を動かす楽しさや喜びを感じながら、人や用具と豊かにかかわったり、仲間と共に

動きを発見したり、運動やスポーツに取り組む意味をつくったり（「創造性」）する。

【実践外国語科】

・世界との出あいを楽しみながら、世界とのかかわりをつくったり（「主体性」）、多様な考えから世界の捉えを更新したり（「協働性」）、国際社会を生きる自分を見つめながら、国際感覚を豊かにしたり（「創造性」）する。

＜実践道徳＞

目標；創造活動等の実践を基に、「材」や「材」と自分とのかかわりを見つめたり（「主体性」）、無自覚的な規範や価値を顕在化して集団の良識をつくったり（「協働性」）、規範や価値の根底や常識を疑いながら新たな道徳的な価値観をつくったり（「創造性」）する。

【１・２年生】

・創造活動等の実践を基に、「材」や「材」と自分とのかかわりを見つめたり（「主体性」）、喜びや悲しみを友だちと共有し、学級集団としての一体感を築いたり（「協働性」）、自分や自分たちの未来をよりよくつくり変える可能性をひらいたり（「創造性」）する。

【３・４年生】

・創造活動等の実践を基に、「材」や「材」と自分とのかかわりを見つめたり（「主体性」）、仲間と共に学級集団としてのよりよさを追求したり（「協働性」）、「材」のもつ意味や価値を自分とのかかわりにおいてとらえたり（「創造性」）する。

【５・６年生】

・創造活動等の実践を基に、「材」や「材」と自分とのかかわりを見つめたり（「主体性」）、人間社会におけるよりよさを追求したり（「協働性」）、一人の人間として生きる自分の生き方をつくったり（「創造性」）する。

＜集団活動＞

目標；様々な集団における他者とのかかわりを通して、集団や場を感じて自分をひらいたり（「主体性」）、集団をよりよくつくり変えたり（「協働性」）、他者との関係の中に生きる新たな自分を見い出したり（「創造性」）する。

（２）研究の経過

	実施内容等
第１年次	・教育課程の理念と構造を共有し、創設した４教育活動の目標や内容を設定する。 ・活動公開やレポートによる情報交換を通し、設定した目標や内容について検証する。 ・職員が先進的に研究を進めている学校を訪問し、研究推進に生かす。
第２年次	・「感性」のはたらきに着眼し、新教育課程の構造を明らかにする。 ・活動公開やレポートによる情報交換を通し、設定した目標や内容を検証する。 ・職員が先進的に研究を進めている学校を訪問し、研究推進に生かす。 ・研究発表会（６月）を行い、１年目～２年目の取組の成果（実施の効果）と課題を整理する。 ・研究の成果や次年度の研究計画をまとめ、家庭・地域への情報提供を行う。
第３年次	・「感性」を根幹とした資質・能力を設定し、それぞれの教育活動の目標や内容、特色等を検証し改善を図る。 ・職員が先進的に研究を進めている学校を訪問し、研究推進に生かす。 ・研究発表会（６月）を行い２年目～３年目の取組の成果（実施の効果）と課題を整理する。 ・研究の成果や次年度の研究計画をまとめ、家庭・地域への情報提供を行う。
第４年次	・「感性」の３つのはたらきを視点に教育活動の目標を見直すともに、子どもの姿から実践の評価と改善を図る。 ・職員が先進的に研究を進めている学校を訪問し、研究推進に生かす。 ・研究発表会（６月）を行い、３年目～４年目の取組の成果（実施の効果）と課題を整理し、教育課程開発の効果を全国に発信する。 ・研究の成果や次年度の研究計画をまとめ、家庭・地域への情報提供を行う。

（３）評価に関する取組

	評価方法等
第１年次	・創造活動、実践教科活動、実践道徳、集団活動の活動公開を行い、実践における子どもの姿から、それぞれの教育活動の目標や内容を検証する。 ・毎学期行う個別懇談における保護者との対話を通して、創造活動、実践教科活動等の実施の成果や課題を聞き取り、評価に生かす。 ・運営指導委員会で、子どもの姿をもとに創造活動・実践教科活動や新教育課程編成についての意見を整理し、改善に生かす。
第２年次	・「感性」をはたらかせる子どもの姿から、新教育課程の構造について検証する。 ・毎学期行う個別懇談における保護者との対話を通して、創造活動、実践教科活動等の実施の成果や課題を聞き取り、評価に生かす。 ・運営指導委員会で、子どもの姿をもとに創造活動・実践教科活動や新教育課程編成についての意見を整理し、改善に生かす。 ・研究発表会（６月）を行い、１年目～２年目の取組の成果（実施の効果）と課題を整理する。
第３年次	・「感性」を根幹とした資質・能力の視点から、新教育課程の構造や特色について検証する。 ・年２回（７月、２月）の学校評価アンケートや個別懇談（毎学期）を通して、創造活動、実践教科活動等の実施の成果や課題を聞き取り、評価に生かす。 ・運営指導委員会で、子どもの姿をもとに創造活動・実践教科活動や新教育課程編成についての意見を整理し、改善に生かす。 ・研究発表会（６月）を行い、２年目～３年目の取組の成果（実施の効果）と課題を整理する。
第４年次	・「感性」の３つのはたらきの視点から、「感性」がはたらく教育活動について検証する。 ・年２回（７月、２月）の学校評価アンケートや個別懇談（毎学期）を通して、創造活動、実践教科活動等の実施の成果や課題を聞き取り、評価に生かす。 ・運営指導委員会で、子どもの姿をもとに創造活動・実践教科活動や新教育課程編成についての意見を整理し、改善に生かす。 ・研究発表会（６月）を行い、３年目～４年目の取組の成果（実施の効果）と課題を整理する。

５　研究開発の成果

（１）実施による効果

以下の表は、児童と保護者の学校評価アンケートの結果である。結果は、平成２９年７月実施（上段）と平成２８年７月実施（下段）のものである。

評価は、「はっきりハイ」「だいたいハイ」と、他に「わからない」「ちょっとイイエ」「はっきりイイエ」の５段階評価。

◯児童への学校評価アンケート結果　（上段:平成29年7月　下段:平成28年7月）

	質 問 項 目	はっきりハイ	だいたいハイ	肯定率
1	学校での活動が楽しい。	77	17	94
		80	16	96
2	活動で「もっと知りたい」「もっとよくしたい」と思う。	41	39	80
		43	35	78
3	活動で行ったことは、自分の生活に役立つ。	51	30	81
		49	31	80
4	自分の考えを生かしながら活動をする。	48	32	80
		47	34	81
5	自分の思っていることをまわりの人に分かりやすく伝える。	30	35	65
		30	38	68
6	学校の友だちとたくさん活動したり、遊んだりする。	83	12	95
		83	10	93
7	友だちにやさしい気持ちでせっする。	60	26	86
		55	29	84
8	学級の活動で「やってみたい」「もっとこうしたい」「もっとこうなりたい」と思うことがある。	59	27	86
		61	23	84
9	学級の友だちと話し合うことで、自分の考えを見直したり、新しい考えをもったりする。	53	27	80
		61	23	84
10	前学年と比べて、考えることが楽しいと思うようになったり、できなかったことができるようになったりしている。	71	20	91
		69	17	86

◯保護者への学校評価アンケート結果　（上段:平成29年7月　下段:平成28年7月）

	質 問 項 目	はっきりハイ	だいたいハイ	肯定率
1	お子さんは、学校での活動を楽しみにしていますか。	80	18	98
		78	20	98
2	お子さんは、学校で活動したことを家庭の様々な場面で生かしているときがありますか。	35	47	82
		36	44	80
3	お子さんは、自分の考えや思いを相手に分かりやすく伝えていますか。	25	47	72
		26	46	72
4	お子さんは、相手の気持ちや考えを大切にして行動をしていますか。	31	54	85
		26	46	72
5	お子さんは、学習材や学習内容と主体的にかかわり、学ぶ楽しさ感じていますか。	35	44	79
		36	46	82
6	お子さんは、自分の変化や成長を自覚していると感じますか。	34	40	74
		31	45	76

〇子どもの評価から

全体的に子どもの学校生活に対する自己評価の高さが見てとれる。特に、活動そのものに楽しさを感じたり、仲間とともに活動したり、自己の成長に気付いたりすることに肯定的な評価をしている子どもが９０％を超える。これらは、子どもの体験の中からわき起こる思いや願いを大切にしながら、今を生きる喜びをつくり、自分の世界をひろげていく「創造活動」を中核とした教育課程の成果の一つであると考える。

一方、「自分の思っていることをまわりの人に分かりやすく伝える。（６５％）」という項目の数値が他に比べて低い。まわりの人には、学級の友だち以外の他者も含まれると思われるが、今後、相手を意識した上でのコミュニケーションを図るような活動が大切になると考える。

〇保護者の評価から

子どもが「学校での活動が楽しい」と感じているように、保護者も子どもの様子から同じように感じとっていることがわかる。また、子どもの評価と同様に、自分の考えを相手に分かりやすく伝えることに対する数値が低い。これらは、子どもと保護者の評価が一致するものであり、当校の教育課程における成果の一端を表していると言える。

子ども自身の自己の変化や成長に対する項目の肯定率が高い（９１％）のに対し、保護者の肯定率が低い（７４％）。子どもが親へ自分の変化や成長を語る機会を設けたり、教師がお便り等を通じて、子どもの姿をもっと伝えたりしていく必要があると考える。

また、以下のような自由記述欄における保護者のコメントからは、創造活動を中心に子どもの姿から活動の価値や意義に関する言及が多く見られた。

【自由記述欄における保護者のコメント】（〇の数字は学年）

・小学校に入学するまでは動物や自然に対して消極的だったが、今では毎日外での活動を楽しくしているようです。いろいろな事に興味をもち、親としてもうれしく思います。①
・自分なりに学校で頑張りたいことを見いだすことができており、それがエネルギーの源になっていたように感じます。②
・創造活動を通して、自然からの学び、その他の歴史なども学び、良い経験をさせて頂いています。③
・価値ある学びをさせていただきありがとうございます。自分の子どもだけでなく、どの子どもたちも目を輝かせて活動しているのを見ると幸せになります。何よりも主体性が伸びる教育で生きる力になっています。④
・毎朝早くから準備をし、１分でも早く学校に行きたがり、休日も次の日を楽しみにしてます。サークル活動、プロジェクト活動でも、自分の役割があることで張り切っています。⑤
・創造活動で学んだことを実生活に役立てられる子どもの姿に驚きです。主体性を培って下さる教育活動に感謝いたします。⑥

〇教師への効果

４年次研究において、「感性」の３つのはたらきに着眼し、それらを教育活動の目標に位置付けながら活動を構想・展開してきた。そのことにより、「主体性」「協働性」「創造性」がはたらかせる子どもの姿をより具体的に思い描くとともに、活動を構想・展開する上での「しかけ・手立て」の在り方を見いだすことにもつながった。

創造活動においては、子どもが身体を通して直接かかわる親和性の高い「材」と、その「材」とかかわる先の文化的・社会的な「材」の両面と一体となりながら自分の生きる世界をひろげていくことから、「材」の先のある世界まで思い描いた「しかけ・手立て」の重要

性を考えるようになった。実践道徳においては、子どもが道徳的な価値観をつくる上で、無自覚的な意識の自覚化や、異なる価値観の顕在化を図るような「しかけ・手立て」の重要性を考えるようになった。実践教科活動においては、教科の本質と「材」の本質を融合させるような「しかけ・手立て」の重要性を考えるようになった。

これらのように、教師が「感性」の３つのはたらきに着眼して、具体的な「しかけ・手立て」を吟味したり、講じたりしながら、常に子どもの「感性」がはたらく教育活動をつくり、つくり変え、つくり続けていくことにつながった。

また、当校では年間多くの学校訪問者が来校する。その訪問者から、以下のような教育活動や職員に対して感想をいただいている。

・附属小を参観し、教師と子どもの距離の近さを実感しました。授業では、子どもたちが自分たちの力を発揮して伸びていこうという思いを見守る、教師の立ち位置や覚悟を感じました。（静岡県島田市）
・参観させていただいた授業において、子どもたちが瞳を輝かせてダイナミックに学ぶ姿に、これまでの教育観を揺さぶられました。（福島県福島市）
・附属小を訪問して学んだ「見失ってはいけない大事なこと」「子どもありき」を、丁寧に当校や市の先生方に伝えていきたいと思います。（神奈川県相模原市）

学校訪問者に対し、丁寧に研究説明を行ったり、実際に授業や活動における子どもや教師の様子を参観していただいたりしながら、外部の方と意見交換を重ねていくことで、教師の見方・考え方をひろげながら研究推進に役立てていくことができた。特に、当校の教育課程のよさや子どもと教師でつくる教育活動の意義を、見つめ直す機会にもなった。

（２）実施上の問題点と今後の課題

「感性」のはたらきに着眼しながら、「創造活動」「実践教科活動」「実践道徳」「集団活動」の４つの教育活動を創設したことで、学校が楽しいと感じ、生き生きと活動している子どもの姿が多く見られるようになった。創造活動を中核とした教育課程を編成することで、創造活動での充実した体験が基となり、実践道徳において子どもが深く思考しながら、道徳的な価値観をつくる姿にもつながっていった。さらに実践道徳で深く思考したことが、創造活動での体験を加速させたり、充実させたりすることにもつながった。実践教科活動では、教師が「材」について思考することにより、教科の本質にも立ち返りながら、子どもの姿を基に指導方法の改善を図っていくことができた。

私たちは、この４年間で培ってきた「感性」のはたらきに着眼した４つの教育活動における教育課程を、現行学習指導要領における教科・領域の枠組み戻していくことになる。その中でも、子どもの「感性」を大切にした教育活動の在り方を常に試行錯誤し、今後も提案していきたいと考えている。

別紙１

上越教育大学附属小学校　教育課程表（平成２９年度）

	創造活動（新設）	実践道徳（新設）	集団活動（新設）	実践教科活動（新設）									総授業時数
				国語	社会	算数	理科	音楽	図工	家庭	体育	外国語	
第１学年	258	34	34	160 (-146)		136		63 (-5)	63 (-5)		102		850
第２学年	250	35	35	180 (-135)		175		65 (-5)	65 (-5)		105		910
第３学年	185	35	35	165 (-80)	55 (-15)	175	80 (-10)	55 (-5)	55 (-5)		105		945
第４学年	165	35	35	165 (-80)	60 (-30)	175	95 (-10)	55 (-5)	55 (-5)		105	35	980
第５学年	110	35	35	175	90 (-10)	175	95 (-10)	45 (-5)	45 (-5)	50 (-10)	90	35	980
第６学年	105	35	35	175	95 (-10)	175	95 (-10)	45 (-5)	45 (-5)	50 (-5)	90	35	980
計	1073	209	209	1020 (-441)	300 (-65)	1011	365 (-40)	328 (-30)	328 (-30)	100 (-15)	597	105 (+35)	5645

＊関連・取り込みの時数は目安であって、活動によって変動する。